柿生郷土史料館　　第６９回カルチャー・セミナー

２０１７年9月２４日　日比谷図書文化館　**水谷　剛**

「江戸時代の勉強会（会読会）に集まる人物像と日本の近代化への道筋」（１）

～　私塾での会読会：ＣＳＲの原点、石門心学　～

Ｒｅｖ．４

来年は、江戸から明治に時代が大きく変わった明治維新１５０周年の節目の年になります。
１５代将軍徳川慶喜が徳川幕府終焉の幕引きをして、薩摩・長州・土佐・肥前の明治新政府にバトンタッチしました。
時代が大きく変わる時は、志を胸に抱く若い人々が飛翔して持てる力を大きく発揮するチャンスでもあり、まさに多くの志士たちが活躍した時代でもありました。
“志士”という言葉は１０代から２０代の若者が理想や夢を実現するため、身を挺して事を実行する人というイメージですが、一人のみで志士になれるわけでもなく多くの先輩、同輩たちの指導、切磋琢磨などによる精神的な基礎づくりから自律（自立）に到るいわば、学習、教育、訓練の時期があります。
現代では、多くの若者は２０歳過ぎまで教育の場が与えられ、自分の意志さえ固ければ多くの勉学のチャンスは幾らでもあり、恵まれています。
この点、２００年ほど前の江戸時代には「人間教育」の場として、現在ほど多岐に亘る教育（勉学）の機会があるとは思えませんが、意外にも、多くの場所で学びの場が開かれていました。
士農工商の身分制度が確立した江戸中期の封建時代には教育機関は身分別に別々の形でしたが、それぞれの「学びの場」では師と弟子の関係で真剣に勉強（修養）が行われていました。
以下、学びの方法や規模など人物像も交えて事例を挙げて注目したいと思います。

１. 江戸時代の学習方法

＜石田　梅岩　座像＞

明治以降近代化の基礎を築いた江戸時代の学びは、多様な形で身分を問わず行われていた。

＜士の身分の学び＞

全国の各藩から選ばれた優秀な代表武士が湯島の昌平黌で「林羅山、佐藤一斎」など一流の学者の講義を受講できる。また、各藩では、藩校や私塾などに通って主として儒学（朱子学）を学んだ。

＜農工商の身分の学び＞

私塾や寺子屋、お寺や商家など奉公先で修行。　一般には、徒弟制度（工）、丁稚奉公（商）などの形で家に預けられて、生活の中で修養を積み一人前になれば暖簾分けで独立。この農民、商人の身分での典型的な学びの事例として本日のテーマの「石田梅岩」を後ほど紹介します。

①　素読

読書の初級段階として７，８歳から漢文の意味内容を解釈せずに声をあげて文字のみを読み暗誦する。深遠な意味は理解できなくともある程度のぼんやりとした内容は身に着く。テキストは、朱子学では、大学、論語、孟子、中庸（以上四書）、孝経、小学、近思録、三字経・・など。

② 講釈

１５歳前後から開始。先生が一節ずつ講解して聴かせる授業。

石田梅岩は、京都で出入り自由の商人、町人、農民など不特定多数の人たちに「講釈」を行った。儒学の内容を逸話や比喩を巧みにつかって分かり易く教訓を与えるものであった。

③ 会読

素読を終了した学力を持つものが、一室で所定の経典の章句を中心に互いに問題提起や意見を闘わせる、いわゆる集団で協働学習する方式。会読には、テキストを読む会読と講ずる会読がある。

「講ずる会読」は、１０人程度のグループの中から順番でテキストの当該箇所を読んで講義をする。他の者が疑問や問題点を質問提起する。講義者はそれに適時応え、全員で討論を行う。参加者同士の切磋琢磨が求められる。石田梅岩著作の「都鄙問答」は、有力門人たちと定期的に「会読」を行った結果の成果物であった。江戸時代以降の代表的会読グループ事例を最後の頁で紹介する。

●会読の3原則

＜相互コミュニケーション＞

参加者全員が積極的にお互いの意見を言いあう「討論」。異なる意見も傾聴する。

＜対等＞

身分や貴賤に関わらず平等な関係。「車座」で「膝を突合せ、胸襟を開いて」話し合う。

＜規則を守る自発的な集団＞

読書や討論で結果を出すため、期日と場所を決め複数の人々が自発的に集会。「社中」ともいう。

2. 石田梅岩（1685～1744）の私塾から「石門心学」へ

石田梅岩は、丹波（亀岡）の農家に生まれ１１歳で京都の商家に年季奉公に出た。４年ほどでその商家の家業が傾き実家に帰って８年ほどしてからまた京都の別の呉服商に奉公した。

家業に精を出す傍ら独学で自分の眼を信じて聖賢の書を読み、悟る処があり、４０歳前半で主家を退き、道を説く準備に入った時に、思想家小栗凌雲との邂逅を経て、自己の思想を確立して４５歳の時京都車屋町の自宅で開講した。

石田梅岩の独自の実践倫理を体現した「石田流心学」の心学という言葉は梅岩自身が名付けたのではなく、門弟たちが付けた名称である。元々は中国宋時代の陽明学を指す言葉であった。

●石門心学の特色概要説明

・江戸時代の身分制度「士農工商」のなかで最低の商身分の社会的有用性を説いた主流倫理

・石田梅岩の個人的修養結果で培った独自哲学で神道、儒教、仏教を統合。

・利己心や欲望で曇っている自己の真の心をそれらから解放。

　解放するための方法　①瞑想　　②禁欲主義（倹約）　③忠誠、孝行、勤勉、職業への献身

・「国恩」に報いるため分限を守り、上位者を敬い、家を治め倹約で贅沢を戒め、家業に精を出す。

・商人階級の者が武士など支配層への批判をしない。

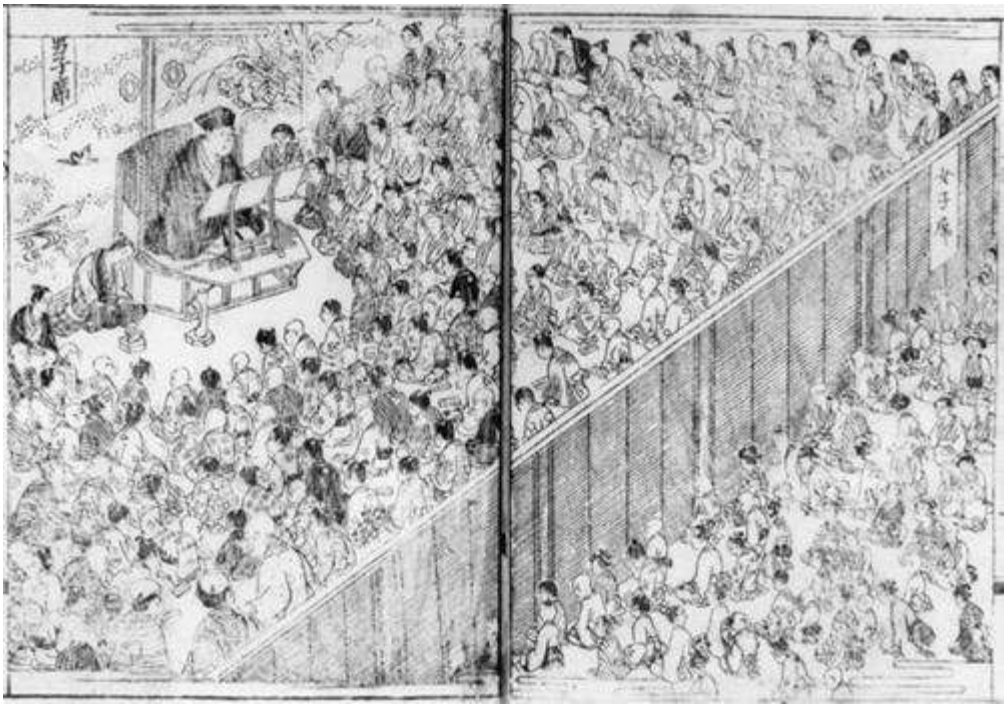
・商人階級のみでなく、武士や農民層にも支持者が広がった。

・主要著書：「済家論」「都鄙問答（とひもんどう）」

●「石田先生事績」:「 心学叢書 第6編 博文館版 明治38年 」より。

（明和の巳丑の年に門人が編集、その後一番弟子の手島堵庵が再編集再刊。）

＜石田梅岩の「講釈風景」＞



石田梅岩は、４３歳の時に商家の奉公先を退き４５歳の時に京都の自宅ではじめて講席を開き、表の柱に書付を掲示。

“何月何日開講。席銭入り申さず候。無縁にてもお望みの方々は遠慮なくお通りお聞きなさるべく候。”

聴衆の席は男女間を隔てて女の居るところには簾（すだれ）をかけ置けり。

自宅での講釈以外に「出講釈」として大阪、河内、和泉など度々行きたまふ。

常に説き給ひし書は、「四書、孝経、小学、易経、詩経、近思録、老子、荘子、徒然草」等。

●心学は道話ともいい、石田梅岩が京都車屋町で定期的に講座を開いて多くの男女が聴き入った。また多くの門人が育ち、江戸茅場町でも門人の中澤道二が講席を開いた。最盛期には、聴衆が数百人も集まった。有名な後の三越越後屋もしばしば店内に講席を設けて、店の者に之を聴かせたという。この時の講師は、弟子の手島堵庵であった。京都、大坂、江戸の３都で大いに興隆した。

高尚な理を説かず、平凡卑近な比喩で、聴く者は下層社会の徳性修養の方法として全国に普及した。

●石田梅岩を囲んだ「会読の集まり」から著書「都鄙問答」編述

月３回のセミナー月例会（月次（つきなみ）の会（え））では、毎回既に周知の題（テーマ）を出し、門弟各人が答案をもって、師を囲んで問答が行われた。即ち、梅岩の考え方を一方的に聴くのではなく、参加者達も自分の思うところを発表する。

参加者は後の梅岩の門弟と呼ばれる存在になっていく。門弟と言っても上下関係ではなく、親しい間柄の友人のような関係であった。

更に１か月ほど主な門弟たちと城崎温泉にでかけ、毎日早朝から夕方まで原稿の作成を行った。（今でいう合宿勉強会）門弟たちの希望もあって、「都鄙問答（とひもんどう）」の著述に着手。この時の原稿は、高弟「手島堵庵（とあん）」の子孫である上河家に現在まで伝存する。

梅岩の心学思想の基礎がこの書に結晶した。本書は市井の一個人の私家版的なものから、のちの心学の根本宝典になり、京都，大阪から全国に普及し、社会教育・成人教育として江戸後期には心学の講舎の

数は累計２００に及んだ。また、「石門心学会」なる全国組織も作られ、現在においても活発な教化活動を行っている。

●都鄙問答の紹介　「巻之一」「巻之二」商人の道を問うの段より抜粋

＜問＞：売買を自分の仕事としているが、如何に渡世していくか商人のあるべき道（心得）は？

＜答＞➡商人の起源は、余るもので不足の物を交換することが基本である。商人は計算に優れた能力を持ちその日その日を過ごし、１銭も軽んじないので富の蓄積が出来ることが商人である。富のもとは天下の人々であり、１銭を惜しむ気持ちで売り物に念を入れて粗末にせず売れば、買う人も最初は買う金が惜しいと思っても買った品物が良いものであれば、惜しむ気持ちもなくなる。更に、天下の財宝を流通させて人民の心を休んずることが出来る。天は何も言わぬが、四季は滞りなく流れ万物が育つ。また、お上の掟を守り、我身を慎むべし。商人と言えども聖人の道を知らなければ、同じ金を儲けながら不義の金となり子孫の絶えることになる。誠に子孫を愛せば、道を学んで栄えることを致すべし。

＜問＞：　商人は貪欲が多い。何時も儲けることを考える。これに無欲な教えは猫に鰹の番をさせることと同じである。学問を進めるはつまらぬことである。

＜答＞➡商人の道を知らざるものは儲けることに勉めて家を滅ぼす。商人の道を知れば、欲心を離れ、仁心を以て勉め道に合う栄を徳とする。

＜問＞然らば、売り物に利を取らず元金で売り渡す事を教えるのか？商人が利欲をなくすことは聞いたことがない。

＜答＞➡俸禄を受けないで仕える人がない。売利を得るは商人の道なり。商人の売利は士の録に同じ。

＜問＞世の中では、「商人と屏風は真っ直ぐには立てない」と言い伝えているが、如何なることか？

＜答＞➡屏風は少しでも歪んでいれば畳めない。また、地面が平らでないと立たない。商人も自然の正直なければ、世間に通用しない。屏風と商人は真っ直ぐであれば立ち、歪めば立たないということ。

＜問＞「商人は市井（しせい）の臣」とは？

＜答＞➡士農工商は天下の治まる制度である。四民は一つでも欠けてはならない。四民を治めるのは君の職分であり、君を助けるは市民の職分である。「士」は元来「位」のある臣で、農民は「草莽（そうもう）の臣」である。商工は「市井の臣」である。

●斎家論より

・文学は末なり。身の行いは本なり。凡て学問は本末を知ることが肝要。
・家国を治めるには倹約が本となること明らか也。
・奢りは不仁のもととなるので謹むべし。
・常の出会いは茶漬け飯、浸し物などで木綿衣類であれば自然に心安く度々出会い、親しくなる。
・上から下まで職分は異なれど理は一つ。倹約を得心して行えば家整い国治まり天下平らかなり。これが大道である。

●梅岩の「本心」とは？

「本心」は自然である。自分の中に天然自然があり、それが「本心」を構成している。

昔から日本では「不自然」という言い方が、批判の言葉になる。

「心」すなわち内心の秩序と、宇宙すなわち天然自然の秩序は同一であり、この２つをつないでいるの

が「形」で、それに従うのが「道」であり、その基本をきわめたものが聖人ということになる。
日常の業務に心学的な意義を感じ、すべてを度外視して専念し、人間の倫理＝道と考えて、これを実行し良心を満足させ、さらに倹約することで、資本が蓄積して、その結果として利潤が自然に蓄積される。
また、梅岩の倹約精神の基本は「自制」であり、それが社会秩序の基礎と考えている。日本の資本主義の精神は、今でも梅岩の石門心学の思想に底流では馴染んでいる。
欧米の資本主義思想は、言葉の上で流行しても石田心学を徹底した方が、日本人には分かりやすい。
結局、石田心学は、ＣＳＲ（Corporate Social Responsibility＝企業の社会的責任）の精神を説いている。「実の商人は、先も立、我も立つことを思うなり」と、CSR の本質的な精神を表現した
また、近江商人の「三方よし」の思想と並んで、「日本の CSR の原点」として脚光を浴びている。
二宮尊徳の「報徳思想」「報徳仕法」と呼ばれる農村復興政策思想にも多大な影響を与えている。

●江戸石川島における「 人足寄場 」と「 石門心学 」

天明の飢饉（1782~1787 年）は、全国で 30 万人～50 万人ともいわれる死者をだした日本近世史上最大災害である。干ばつ、冷害、洪水、噴火降灰の被害に各地の農民は田畑を捨て、江戸などの都市へ流入したが、幕府の対応の遅れで、多くは無宿者となり、乞食、悪事を働く者が徘徊し、暴徒による打ち壊しなど治安悪化が常態化した。
１０代将軍、徳川家治の老中、松平定信の最初の大事業は無宿者対策だった。　浮浪者、刑期後の再犯者は、佐渡や伊豆七島へ人足として送り、老人、病人は江戸の無宿養育所に収容した。
さらに、定信は、当時、南町奉行所の火付盗賊改めの長谷川平蔵（鬼平）に指示して、(1790 年)、隅田川河口の中州、石川島と佃島の間の１万６千坪の土地に無宿者の収容所を作った。人足寄場は、更生施設としては画期的な処遇制度で、明治以後も受け継がれた。入所者に「寄場人足共へ申渡書」 を読み聞かせ、人足寄場が罪人を収容する牢屋でないことと、遵守事項を告知した。　人足には、髷（まげ）を許可し、施設外での仕事、町への買い物を許した。男女別に雑居部屋で、手職に就かせ、技能のない者は出所後に役立つ仕事を学ばせた。　作業には、収益の一部を施設の運営費に充て、一部を賃金として支払い、一部を出所後の生活の元手として預かり、一部は、日常生活に使うことを許した。　病人は医師に診せ、病棟も備えていた。
また、<u>道徳を教える石門心学や</u>習字、読み方を学ぶことも奨励した。
<u>松平定信を通じて、心学者・中沢道二（石田梅岩の門人で心学の大家）を招き、心学（実践的な道徳）講義を通して辛抱すること、努力することの大切さを学ばせたことで、すさんだ心を癒した。</u>
　収容期間３年で、自立見込みのある者には、それ以前に釈放をし、再犯の恐れある者はそれ以上の期間収容した。　作業を怠ける者には１００敲（たたき）きの制裁があり、逃亡者には死罪が科せられると告げた。釈放時には、自立手当金のほか、寄場が保証人となって店舗または農地を借り与えた。この釈放者への手厚い保護は、現在の刑務所でも行われていない。
寄場人足たちの更生の為の長谷川平蔵の仁愛溢れる扱いは、人足たちの心に響いた。　法制史学者の瀧川政次郎教授によると、安政３年８月大津波で、人足寄場も被害を受け、人足に解放命令が出たにも関わらず、７０人余りは残って防災に努め、他は全員、後日、戻ってきた。松平定信の時代には、釈放後、改心し正業に就いた者が、毎年、２００人あったとする記録もあり、これらは、罪人を収容する牢屋とは違った扱い方をした画期的処遇が効果をおさめた例である。

無宿者や前科者の強制収容施設として８０年余り続いた石川島人足寄場は、明治新政府以後、石川島徒刑場、懲役場、更には石川島重工➡IHI 移転のあと、現在は公園とマンション群になっている。

3.　おわりに

1）内田嘉吉の蔵書に「心学叢書」あり

私は以前から個人の蔵書（書斎）は、その人の人物像、思想遍歴、を垣間見ることが出来ると思っています。当初内田嘉吉蔵書の中に「心学叢書」があることを発見して気になっていました。石門心学はすでに言葉ぐらいは理解していたのですが、内田嘉吉の高級官僚とか貴族院議員の肩書と商人道徳を説く石田梅岩の書物を読むという結びつきが不可解でした。しかし、晩年の内田嘉吉は、ボーイスカウト運動や東京商業学校校長など教育分野でも功績があります。青少年の精神的面での教育の在り方を真剣に考えるときに参考としたのが江戸時代の有効な子弟教育の実態・・・特に江戸時代後期に農工商一般庶民層から圧倒的な指示を得ていた「石門心学」の真髄を知りたいという気持ちからこの叢書を手に取ったのではないかと思います。

このことは、下記に紹介する東洋大学創始者で哲学者の井上哲次郎が書いた心学叢書の推薦文（跋）を読むと、得心できます。（筆者が意訳）

2）内田嘉吉蔵書の「心学叢書」から（井上哲次郎の　跋（ばつ）（あとがき）　より）

近来倫理の学、道徳の理論を講ずるもの漸く多くなり、しかし、理論は高尚で精緻になり専門学者には有益ではあるが、世間普通の人は次第にこれに遠ざかりつつある。

この状況に対し、道徳に関する事項を平易に説明し世間普通の人を教化する策はあるか？

徳川時代にも、儒者が倫理を講ずるものが多いが、武士が中心になっており、普通の人に対して石田梅岩が心学を唱道し、道徳に関する事項を平易に説明教化する端緒を開いた。これを更に手島堵庵が通俗倫理（心学）として、この叢書に蒐集した。

3）海外の経営学者の注目

米国の社会学者ベラーは、石田梅岩を経済と道徳の両立を目指した人物で日本の CSR 的経営の礎を作った「江戸時代のピーター・ドラッカー」と表現している。: 著書「徳川時代の宗教」より

石田梅岩が生きた 1600 年代後半から 1700 年代前半は、「三方良し」で有名な近江商人などの江戸商人商道徳が体系化され始めた頃で 300 年前の石田梅岩の言葉や思想が現代でも注目される。

特に、過去の食品偽装問題や最近でも多くの有名な大企業の「コーポレイト・ガバナンス」の欠如による不祥事の発覚が後を絶たない。

まさに、「勤勉・正直・時間に正確」など、近代化と高度成長を支えた日本人の美徳と呼ばれたものの基礎には、江戸時代の石門心学の底流が貢献していると思われる。

また、今後の企業経営で「社会における貢献:ＣＳＲ（Corporate Social Responsibility）」も重要な経営の眼目となっており、江戸時代という時代での政治の枠組みにおける石田梅岩思想が再度注目されている。情報化で飛躍的に拡大したグローバル化経済に対して、米国の新大統領が唱える世界経済の自由化に掉さすような「自国の利益優先主義」を強調する風潮には「一抹の危惧」を感ずる。

４）日本の老舗企業の「凄さ」

・日本では多くの老舗企業が長年事業を継続している。（財）日本商工総合研究所の「平成 25 年度調査報告書：老舗企業の研究」（http://www.shokosoken.or.jp/paper/theme/2013/201305.html）によると

・創業から 100 年以上事業を継続している老舗企業が２万社以上、世界でも類を見ない長寿企業大国である。世界全体で、創業 200 年以上の会社の 40～45%が、日本に存在しその９割以上は中小企業である。（創業 200 年以上 1,200 社、創業 400 年以上 190 社、創業 500 年以上 40 社もある。）

＜京都　地場の老舗、優良企業＞

石田梅岩の心学講義の伝統を継承する京都の老舗企業についてみると、創業から 100 年以上経つ「老舗」として京都府から表彰された企業は 1700 を超えている。

京都企業の多くに共通する経営の哲学は、石田心学の真髄である「先義後利」の精神：「道義を優先し、利益は後でついてくる」で、高い倫理観や CSR にもつながっている。

1980 年代のバブル経済が崩壊しても、京都企業が盤石であったのは、土地や株に、無闇に手を出さなかったり、この経営哲学の故に、抑えが利いて堅実な経営だった故である。同様に、高い収益性を保つのも自社製品の付加価値を明確に定義し、価格競争に巻き込まれない経営をしているからといえる。

＊京都地場企業の例：（食品、醸造、繊維織物などを除く製造工業、物流関連）

・オムロン　・村田機械　・村田製作所　・イシダ（秤）　・ワコール　・堀場製作所　・島津製作所
・日本輸送機　・日本電産　・佐川急便　・ローム（電子部品）・日本新薬　・任天堂　・グンゼ

５）三井高房の「町人後見録」（商人道のケーススタディ）

江戸中期の商人で三井本家創始者高利の孫の三井高房（1684—1748）が、番頭の中西宗助の助力を受けて子孫のために残した教訓書 3 巻。1728 年～33 年の間に成立。石田梅岩が京都で町人相手に講釈を始めたのが、1729 年なので丁度同一時期である。京都の有力町人の盛衰の実例を分析し、没落の原因を大名貸、不用意な金融の拡大や奢り、女色や遊芸への深入りなどとした。

繁栄の条件として町人は「仁義」と「算用」の均衡を保ち、倹約を重んじ家業に精励することを強調する。高房は、町人の前記のような心構えを「町人心」「商人心」として自覚した。この１０年ほど後に石田心学の勃興時期となるが、その前に既に商人道の基礎が三井家では確立されていた。

＜　参考文献　＞

・「心学叢書」第１篇～第６篇　特別研究室在庫　明治４２年　博文館　257.5.6
・「日本教育文庫：心学篇」都鄙問答、斎家論、　明治４４年　同文館　370.8　二 12
・「近世日本世相史」斎藤隆三　大正１４年　博文館　210.3 サ 154
・「江戸社会史」呉文炳　昭和４年　啓明社　210.5　タ 140
・「江戸の読書会」前田　勉　平凡社
・「石田梅岩」　柴田　実　吉川弘文館
・「日本政治思想史」渡辺　浩　東京大学出版会
・「江戸後期の思想空間」　前田　勉　ぺりかん社
・「自由学問都市大坂」　宮川康子　講談社選書メチエ２３２
・「日本倫理思想史（４）」　和辻哲郎　岩波文庫

「会読のグループ　事例（江戸時代以降）」　　水谷　剛　纏め

名称	主宰者 創始者	主な弟子 参会者	時代	テーマ、内容、エピソード	著作・記録 （主要）
石門心学 月次（つきなみ）の会（え）	石田梅岩	手嶋堵庵 中沢道二	1685～	石田梅岩哲学で神道、儒教、仏教を統合し、利己心や欲望で曇っている自己の真の心をそれらから解放。特に商人道が全国に広まる	・都鄙問答 ・済家論
懐徳堂 幕府公認 大坂学問所	大坂町人 ５名 ＊右記	三宅石庵 中井愁庵 三宅春楼 中井竹山 中井履軒 山片蟠桃	1724～ 1869	三星屋武右衛門（貸家業） 道明寺屋吉左衛門（漬物、醤油醸造業） 船橋屋四郎右衛門（毛綿屋） 備前屋吉兵衛（材木屋） 鴻池又四郎（豪商鴻池の分家）	・子華孝状 ・稲垣浅之丞孝記録
蘐園（けんえん）　塾	荻生徂徠	太宰春台 服部南郭 山県周南 安藤東野 平野金華	1690～ 1728	将軍綱吉の死去と柳沢吉保の失脚後、茅場町に居を移し、私塾を開き徂徠学派を形成 豪胆で中国語にも堪能。多くの門弟を育てた。	・徂徠先生答問書 ・紫芝園規条件
昌平坂学問所書生寮	林羅山	久米邦武（佐賀藩から）	1690～ 1868	「寮内で申し合わせて会読をし、議論を闘わすことを有益とし、優秀な学友の卓抜な議論は人を啓発する力が強い」	久米博士９０年回顧録
適塾	緒方洪庵	福沢諭吉 村田蔵六 高峰譲吉	1838～ 1868	毎月６回各級１０人～１５人役割分担して会読会実施。 ゾーフ部屋(蘭和辞書)競争使用	福翁自伝
蘭学の会読	前野良沢	杉田玄白 大槻玄沢	1771～ 1774	「ターヘル・アナトミア」の日本語翻訳を前野良沢自宅で会読方式で実行（訳語の確定）	解体新書
長州藩　萩 野山獄の 会読	吉田松陰	野山獄 徒刑囚	1854～ 1857	・ペリー乗船に密航企て失敗し獄中で孟子など会読を行った ・松陰は、獄中３年で合計１４６０冊（月４０冊）読破	野山獄読書記 講孟余話
咸宜園（かんぎえん）	広瀬淡窓	高野長英 大村益次郎 清浦奎吾 上野彦馬	1805～ 1897	大分県日田市にて開塾。歴代 10 代の塾主で運営され塾生は日本各地から延べ 4,000 人を超える日本最大級の私塾となった。	遠思楼詩鈔 析玄 義府 迂言

柿生郷土史料館　　第６９回カルチャー・セミナー　　２０１７年9月２４日

日比谷図書文化館　特別研究室　水谷　剛　Rev.2

「江戸時代の勉強会（会読会）に集まる人物像と日本の近代化への道筋」（２）

～　杉田玄白・前野良沢等の「会読による阿蘭陀語翻訳成果：解体新書」～

１．はじめに

蘭学発祥　の記念碑

慶応義塾発祥　の記念碑

築地の聖路加病院前の道路ロータリーに二つの記念碑が並んで建っています。(右写真参照)

「蘭学発祥の碑」と「慶應義塾発祥の碑」です。

この碑文で本日のテーマ「蘭学発祥」を簡潔に説明しています。以下碑文の説明全文です。

＜蘭学の和泉はここに＞

１７７１年明和８年３月５日に杉田玄白と中川淳庵とが前野良沢の宅にあつまった。ここはこの近くの鉄砲洲の豊前中津藩主奥平家の屋敷内にあった。３人は昨日千住骨が原で死体解体を見た時、オランダ語の解剖書「ターヘル・アナトミア」の図とひきくらべてその正確なのに驚き、発憤して早速今日からこの本を訳し始めようと決心したのである。ところがそのつもりになって「ターヘル・アナトミア」を見ると、オランダ語を少しは知っている良沢にも、どうして訳していいのか全く見当がつかない。それで身体の各部分についている名を照らし合わせて訳語を見つけることからはじめて、いろいろ苦心の末、ついに１７７４年・安永３年８月に解体新書５巻をつくりあげた。これが西洋学術書の本格的な翻訳の初めで、これから蘭学がさかんになった。このように蘭学の泉はここに湧き出て日本の近代文化の流れに限りない生気を注ぎ続けた。

１９５９年昭和３４年３月５日　　第１５回日本医学会総会の機会に

日本医史学会　日本医学会　日本医師会　　文　緒方富雄（緒方洪庵の曾孫）　設計　谷口吉郎

因みに、慶應義塾発祥の碑の碑文は

(正面の碑文)

安政 5 年 福沢諭吉 この地に学塾を開く。創立百年を記念して 昭和 33 年 慶応義塾これを建つ。

(側面の碑文)

慶応義塾の起源は 1858 年 福沢諭吉が 中津藩奥平家の中屋敷に開いた 蘭学の家塾に由来する。その場所は これより北東 聖路加国際病院の構内に当る。

この地はまた 1771 年 中津藩の医師 前野良沢などが オランダ解剖書を初めて読んだ 由緒あるところで，日本近代文化発祥の地として記念すべき場所である。　　1958 年 4 月 23 日除幕

２．豊前中津藩の江戸中屋敷・前野良沢家での同盟（会読会）

上記の碑にあるように記念すべき近代医学の始原としての西洋の学術書の最初の翻訳成果である「解体新書」蘭和翻訳が豊前中津藩の屋敷内で完成した。翻訳の同盟（会読会）の主要メンバーである杉田玄白が８３歳の時に著した「蘭学事始」と吉村昭の歴史小説「冬の鷹」を参考にして劇的なエピソードを含めた人間ドラマを紹介する。

●藩医たちが翻訳作業を会業（会読）方式で進める・・

・1771 年（明和８）３月～1774 年（安永３年）８月　の約３年半の期間で前野良沢を「翻訳責任者」として良沢自宅（築地の豊前中津藩中屋敷）で、杉田玄白、前野良沢、中川淳庵（じゅんあん）、桂川甫周（ほしゅう）の４人のメンバーが辞書なしで困難な壁を越えて翻訳に成功した。

翻訳する原書はドイツ人クルムスの著作「ターヘル・アナトミア（解剖学書）阿蘭陀語訳 1743 年刊」で、良沢と玄白が偶然同じように藩主の計らいにより長崎で入手したものであった。

玄白自身が「蘭学事始め」の中でその会業の様子を紹介している。

・かの「ターヘル・アナトミア」の書にうち向ひしに、誠に艪舵なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、ただあきれにあきれ居たるまでなり。

⇒　最初は「ターヘル・アナトミア」の書を前にして、船が艪や梶など航海に必須の機器なしに大海に出たが、頼りにする方法もなく呆然として何もできない状況であった。

・「この会業怠らずして勤めたりしうち、次第に同臭（同類）の人も相加わり寄り集うことになりしが、各々志すところありて一様ならず。」

⇒　４人で会読方式の翻訳を週２回ほど怠らずに進めていたが、そのうちに、同類の関心を持つ仲間も加わって、翻訳会読を進めたが、各人それぞれ、進め方に思うところが異なっていた。

各人の個性が異なるので自ずから役割分担のようなルールができて会読の能率をあげることとなった。

＜会読会メンバー主要４人の紹介＞（杉田玄白・前野良沢の詳細は末尾の参考資料参照）

・杉田玄白⇒会の実質リーダー、渉外など総務担当、記録・出版（解体新書）、広報担当

若狭小浜藩藩医、「天真楼」（後述）と呼ばれる医学塾を開く。外科に優れ、「病客毎月百人余りも療治」と称され、晩年には 400 石に加増。（1733 年－1817 年）享年８５歳

・前野良沢⇒蘭和翻訳の実質責任者（盟主）、しかし、成果の「解体新書」に名前掲載を辞退

豊前中津藩藩医で蘭学者。『解体新書』の主幹翻訳者。（1723 年―1803 年）享年７６歳

良沢は、奇異の才あり、蘭学を終身の業となし、その言語に通達し、蘭語の書なんでも読み解く志強く、世間との交わりは避けていた。

晩年の青木昆陽に師事した後、1769 年（明和 6 年）藩主の参勤交代について中津に下向した際、長崎へ留学中に手に入れた西洋の解剖書『ターヘル・アナトミア』を盟友と 3 年 5 ヶ月で翻訳し『解体新書』を編纂した（1774 年刊行）。しかし、解体新書発行当時、その業績は知られておらずその存在が知られるのは翻訳作業の困難を記した杉田玄白の『蘭学事始』記述によった。良沢が名を出さなかったのは、翻訳の不備をよく解っており、（とはいえ、当時の蘭学の語学水準からすれば、その翻訳は奇跡に近い完成度）これを恥としたためと言われる。その後、蘭学への真摯な姿勢より、藩主奥平昌鹿（まさか）より賞賛された。良沢はオランダ語研究に夢中な余りに藩務を怠りがちで、同僚の藩医たちは昌鹿に良沢の職務怠慢を訴えた。ところが昌鹿は、「日々の治療も仕事だが、治療のために天下の民に有益なことを成そうとするのも仕事である」と言って取り合わなかった。

・中川淳庵⇒翻訳の副責任者格で原案の完成後校閲責任者として実務を支えた。

祖父の代から小浜藩の蘭方医を務め、江戸麹町に住んだ。オランダ物産についても興味を持ち、カピタン（オランダ商館長）が逗留した長崎屋にしばしば訪問する。1776 年、博物学者ツンベリーが江戸参府したときには、医学の他に植物標本作成法の教えを受けた。

1771 年杉田玄白らと共に『解体新書』翻訳に参加し、訳述に当たる。その後もオランダ語の学習を続け、1778 年若狭小浜藩の御典医となり、1786 年死去。

1771 年、杉田玄白がターヘル・アナトミアを入手する仲立ちをし、同年小塚原刑場で腑分けに立ち会い、翌日から前野良沢・杉田玄白とともに翻訳作業を開始する。1773 年『解体新書』上梓以降も前野良沢のもとでオランダ語の学習を進め 1776 年、桂川甫周とともに江戸参府中のツンベリーを訪ねる。医学・博物学について教えを受ける。ツンベリーは、淳庵はかなりよくオランダ語を話すと記している。

・桂川甫周⇒　「解体新書」完成後の出版に関して幕府との交渉窓口

代々幕府の城中奥医師の家柄に生まれる。１７６９年１９歳で幕府の奥医師となり、１７８３年医師最高の位、法眼となる。蘭学活動や外交上にも役割を果たした。解体新書の出版で幕府側との交渉にも活躍した。

●「解体新書」翻訳の悪戦苦闘（杉田玄白の蘭学事始より）

・和蘭翻訳といふことは、古今になきところの最初なれば、この読み始めの時にあたりて、細密なるところはもとより弁ずべきやうもなし。医たるもの先ず第一に、臓腑内景諸器の本然官能を知らずしては済まず。各々その実を弁えて互いに治療の助けになさばやと思へるが本意ばかりなり。この志ゆえ、この訳を急ぎて早くその大筋を人の耳にも留まり解し易くなして速やかに悟り得せしめんとするを第一とせり。いずれにしても、人々の分かり易きを目当として或は翻訳し、対訳し、或は直訳、義訳と、様々に工夫し、昼夜打ちかかり、草稿は１１度に３年半にわたり漸くその業を遂げたり。

（現代語訳）和蘭翻訳は、過去類がなく、始めるにあたっては、細部は勿論のこと弁じようがない。医師としては、まず、内臓の機能を知らないでは先に行かない。各人は早く翻訳して治療の効果を挙げたいと思うばかりである。この思いで、翻訳を急ぎ大体わかる大意をつかむことを優先した。いずれにしても、人々が分かるように翻訳、対訳、直訳、義訳しと種々工夫し、昼夜連続草稿を１１度も推敲して３年半で漸く完成にこぎつけた。

①翻訳（対訳）：オランダ語に相当する日本語があるときにこれをあてる。

②直訳：オランダ語の音をそのままうつして、漢字をあてるもの

③義訳：オランダ語の意味をとって、語をつくるもの。

●「長崎屋」での阿蘭陀人や通詞との会話で勉強

・会読の場所（築地鉄砲洲の中津藩屋敷内の前野良沢邸）から歩いて行ける日本橋近辺（現在の JR 新日本橋駅）にあった、オランダ人の江戸参府旅行宿泊場所であった「長崎屋」に長崎出島に赴任する商館長と医師をかねた随員それに通訳（通詞）一行が３月から５月にかけて滞在していた。

・翻訳でどうしても不明のことは、まとめてこの「長崎屋」にでかけて、直接通詞に質問したりした。

●長崎オランダ商館長の江戸参府について

・通商を唯一許可されたオランダから長崎に赴任する商館長は、お礼と表敬訪問の目的で江戸の徳府川

将軍に面会し、珍しい西洋の物を献上する習わしであった。
阿蘭陀商館長の江戸参府は、１６０９年（慶長１４年）に始まり、１６３３年からは、原則として毎年、更に１７９０年以降は5年目ごととなり、１８５０年に廃止となった。
この江戸参府は２５０年にわたり、合計回数１６６回を数えた。
・商館長の他にオランダの医師がつき、日本人は通詞（大通詞、子通詞）が２名随行して通訳した。
・この滞在期間中に江戸の蘭学者たちは「長崎屋詣で」で質問して疑問解消に努めたり、蘭学の知識を蓄えた。江戸の蘭学は「長崎屋」がみなもとであった。

●杉田玄白の８３歳で「蘭学事始」執筆完成後の感想（「蘭学事始」下巻より）

・一滴の油を広い池に投ずれば、散って満池に及ぶという。これと同じように５０年前に前野良沢、中川淳庵、玄白の３人が思いついて実行したことが、四方八方に流布し、多くの翻訳書も出版された。西洋の学問の初めから見ていて今日のように隆盛に至ったのは、わが身の幸いのみではなく、大御神の天下泰平に一統賜った御かげである。

●「蘭学事始め」自筆原稿の発見：福沢諭吉が明治２３年第１回日本医学会総会で再版された「蘭学事始め」の序の文章で友人が偶然露天商で発見したいきさつを紹介している。
～～杉田家に伝わる杉田玄白の「蘭学事始め」原稿は、安政江戸大地震のときに焼失したと思われていた。友人や門下生の誰も写しを持っていなかったので唯不幸を歎ずるのみであったが、幕末に神田孝平が散歩中の湯島聖堂裏で露天商から古びた「蘭学事始め」を発見した。まさに玄白が大槻玄沢に贈った親筆のものであった。福沢諭吉は友人としてこれを聴き、書を読んで先人の苦心を察し、其の剛勇に驚き、其の誠意誠心に感じ、感極まりて泣かざるは無し。～～

●杉田玄白の蘭学塾「天真楼塾（てんしんろうじゅく）」

『解体新書』の出版によって杉田玄白は蘭学の第一人者となり、天真楼塾には多くの弟子が集まった。
一関の建部清庵から使わされた衣関甫軒、建部亮策（三代清庵由水）、大槻玄沢、建部由甫（のちに杉田玄白養子伯玄）らが入塾している。また宇田川玄随の名が『蘭学事始』に見える。高野長英の養父高野玄斎も天真楼塾に学んでいる。一説に弟子は百四人という
杉田玄白だけが弟子を教育したのではなく、大槻玄沢ら高弟が行うこともあった。長崎から来た元通詞の荒井庄十郎も、玄白のところで会話を教えた。

＜大槻玄沢の芝蘭堂（しらんどう）との関係＞

のちに高弟の大槻玄沢が芝蘭堂を起こし、蘭学を習いたい弟子はそちらへ送られた。オランダ語の能力は杉田玄白はたいしたことがなかったようで、前野良沢に学び長崎留学もした大槻玄沢の方が明らかに上回っていた。また、玄白は毎日往診に忙しく、あまり時間を取れなくなっていたことも関係がある。
天真楼塾と芝蘭堂は密接な関係を持って運営を続けていた。文政 9 年（1826 年）に発行された『重訂解体新書』の図版表紙に、天真楼と芝蘭堂の字がともに見える。
玄白の隠居後は、養子の杉田伯玄が天真楼を嗣いだ。

●大槻玄沢の「蘭学階梯」

・内田嘉吉蔵書に「蘭学階梯」が存在する。1788 年発刊で、「蘭学へ登るための階段梯子（はしご）」の名のとおり、蘭学入門書である。上巻は日蘭通商と蘭学勃興の歴史を述べ、下巻にオランダ文法の初歩を説いている。

●杉田玄白の家塾「天真楼塾」から大槻玄沢の「芝蘭堂塾」へ

「解体新書」訳業は、自発的な会業（会読）仲間での成果であった。その後、さらに「病論会」という流派を超えた医者たちの知識交換会から杉田玄白の家塾「天真楼塾」に発展する。また、大槻玄沢は、これとは別に自宅で「芝蘭堂塾」と名付けた蘭学者の会合センターとして賑わった。特に多くの蘭学者を自宅に招いて「阿蘭陀正月」の宴会を催したが、この情景が「芝蘭堂新元会図」として早稲田大学図書館に保存されている。(国の重要文化財)

主な参会者は、◎は解体新書会読会メンバー

＊大槻玄沢：芝蘭堂主宰者蘭学大家

＊杉田伯元：16 歳で杉田玄白の門に入り、玄白の養子。

＊宇田川玄随：玄沢や玄白らに師事し、オランダ流の内科を興した。

◎桂川甫周:『解体新書』翻訳当初から参加し、「天性逸群の才」と評された

＊大黒屋光太夫：床の間の前で、ロシア文字が書かれた一枚の紙を手にしている、宴席の特別ゲスト

◎前野良沢：玄沢の師匠格で解体新書翻訳の実質責任者。

＊稲村三伯：わが国最初の蘭日辞書『波留麻和解（ハルマわげ)』を刊行した。

＊司馬江漢：銅板画の洋風画表現に成功した。

＜阿蘭陀正月の由来＞

・出島の阿蘭陀商館長（カピタン）は、毎年正月にお世話になっている通詞、町年寄、出島乙名等を招待してフルコースの阿蘭陀料理でもてなした。１６６３年から幕末まで続き長崎の年中行事となっていた。大槻玄沢もこれと同じ趣向で蘭学者などを自宅に招き“おもてなし”でお互いの情報交換の場とした。

３．山脇東洋（１７２６～１７６２）による日本最初の人体解剖（観臓）と時代背景

山脇東洋は、亀山に生まれ、理論よりも実践を重視する古医方を学び、カワウソの解剖から陰陽五行説に基づく漢方流の人体図に疑問を抱き、1754 年 2 月、京都所司代の許可を得て死刑囚の腑分けに立会い、観察記録を行う。1759 年にはその成果を解剖図録『蔵志』として刊行。漢方医による五臓六腑説など、身体機能認識の誤りを指摘した。

この観臓から 17 年後、1771 年山脇東洋の影響を受け、死刑囚の解剖に立ち会った杉田玄白、前野良沢らがより正確なオランダ医学書の翻訳に着手し、「解体新書」として翻訳出版がなされた。

ヨーロッパではベサリウスの解剖書が出版されたのが 1543 年である。更に日本で解剖学が医師教育の中に入るようになったのは 1857 年、長崎に来日したポンペからといわれている。実にヨーロッパの国々に遅れること 300 年以上となる。日本における解剖学の源流は観臓を行った山脇東洋にある。

その時代は人体解剖には抵抗が強かったため批判を浴びるが（注１）、国内初の人体解剖は蘭書の正確性を証明し、医学界に大きな影響を与える。

（注１）元東大解剖学教授養老先生の「1992 年 NHK 人間大学講座講義録」によると、江戸時代中期の「人間の体」に対する考え方は、柳生宗矩（むねのり）の免許皆伝書「兵法家伝書」の中にある。
人の命は目に見えない「神気」であり、今でいう「意識」や「エネルギー」のことであった。
「神気」が無くなった身体は「空の器」であり、そんなものを調べても何も分からない・・と批判した。つまり、個人の「身体の中」より「心」「制度」「家」「武士道」などを優先した。

４．前野良沢の研究書「前野蘭化」について

・この研究書は、昭和１３年（１９３８年）発行の岩崎克己氏の自費出版大著である。岩崎克己は１９０５年生まれで１９９３年没の昭和時代の在野の研究者で、東京帝国大学大学院英文科から東京外国語大学卒でオランダ語・ポルトガル語・スペイン語・ロシア語・ドイツ語・中国語・チベット語など多国語を習得した。戦後は中国チベットを中心に研究した。本著作の目的は、「前野蘭化なる人物に託して」「黎明期」の「蘭学」を究明することにあると、本書の「はしがき」にある。
前野良沢の研究専書はほかに見当たらない。蘭学史の基本書であり、今となっては貴重な書である。
１９９７年平凡社の東洋文庫から３分冊で公刊された。
岩崎氏の東大～外語大を経て語学の専門家としての略歴からは、内田嘉吉の蔵書構成にある多様な言語著書のコレクションを垣間見るような気がする。
なお、岩崎氏は早稲田実業、桜蔭学園の英語講師勤務後昭和１８年中国で応召、昭和２１年復員帰国したが、その間重要な蔵書、原稿、研究資料は殆どを戦災で焼失したとのことである。
以上は、本書の解説者元青山学院教授の「片桐一男」氏の解説による。

５．蘭癖大名

徳川吉宗の享保の改革により、洋書輸入が一部解禁されたことから江戸中期以降、蘭学研究が盛んになったが、学問的な興味だけではなく、生活様式や風俗・身なりに至るまで、オランダ流（洋式）のものを憧憬し、模倣するような者まで現れるようになり、中には蘭語名まで持つ者まであった。
但し、江戸時代中期から後期にかけての史料においては「蘭癖」という語の使用例は多くない。幕末期にいたって、水戸藩等攘夷派から「西洋かぶれ」の意で、蔑称として用いられる例が多くなり、明治時代になって普及した語といえる。すなわち「鎖国」等と同様に、明治以降になって普及した後に、それ以前の「蘭癖」的人物もこの語で形容されるようになったものであろう。
吉雄耕牛・平賀源内・大槻玄沢らは、オーストリア領オランダ（ネーデルラント連邦共和国）が滅亡した 1795 年正月に、オランダ正月と呼ばれる太陽暦で祝う正月行事等の西洋式習俗を恒例行事としてスタートし、欧州にオランダが存在しない事を日本国内で隠し続けた。蘭癖の上級武士は、雇い主を失ったオランダ商館の存続を偽装し、さらには滅亡したオランダ国旗をアメリカ船に掲げさせて入港させ、オランダ国が存在しない期間、他の日本人を欺いて日蘭貿易を偽装した。
このような蘭癖の存続と拡大は、オランダ商館長と最も密接な関係にあった島津重豪の画策を助けた。
その画策とは、オランダ商館長であったヘンドリック・ドゥーフ著『日本回想録』によると、娘を将軍の正室として嫁がせることで幕府と薩摩藩を結合させ、諸侯を服従させようというもの。⇒ 篤姫（あつひめ）
蘭書やオランダの文物・珍品は非常に高価であり、購入には莫大な経済力が必要だったため、「蘭癖」と称される人物には、学者よりも大商人や大名、上級武士などが多い。特に藩主の場合は「蘭癖大名」等

と呼ばれる。殿様趣味の枠を超えて、自ら蘭学研究を行ったり、学問の奨励する等、文化的な評価は高い反面、蘭学趣味が高じて藩財政を窮地に陥れるなどの傾向も見られる。
蘭癖大名の分布としては、主に九州の外様大名が多い。これはオランダに開かれた港・長崎が近く、蘭書や輸入品の入手が容易だったことと無縁ではない。その点、関東に所領を持つ譜代大名の堀田正睦はかなり例外的である。
このような蘭癖大名の典型例として知られる代表的な人物として、シーボルトと直接交流のあった長崎警固を勤めた福岡藩主の黒田斉清や薩摩藩主・島津重豪が挙げられる。重豪の子である奥平昌高・黒田長溥や、曾孫の島津斉彬もまた、重豪の影響を受けたためかそれぞれ蘭癖大名と称された。

＜著名な蘭癖大名＞

・細川重賢（熊本藩主、1721 - 1785）
・**島津重豪**（しげひで）（薩摩藩主、1745 - 1833、享年８９歳）：昌高と江戸長崎屋を訪問、自ら蘭学を勉強し、ローマ字を書き、オランダ語を話すこともできたといわれている。会見したシーボルトは、「重豪公は80 余歳と聞いていたが、どう見ても 60 歳前後にしか見えない。開明的で聡明な君主だ」と記す。
・奥平昌鹿（中津藩主、1758-1780、中津藩第３代、前野良沢の蘭学を奨励）
・**奥平昌高**（中津藩主、1781 - 1855、島津重豪の次男、親子で長崎屋に通い蘭学趣味）
・**黒田長溥**（福岡藩主、1811 - 1887、島津重豪の九男、黒田斉清の養子）
・**島津斉彬**（薩摩藩主、1809 - 1858、島津重豪の曾孫）
・佐竹義敦（久保田藩主、1748 - 1785、曙山）
・朽木昌綱（福知山藩主、1750 - 1802）
・松浦静山（平戸藩主、1760 - 1841）
・黒田斉清（福岡藩主、1795 - 1851）
・堀田正睦（老中・佐倉藩主、1810 - 1864）
・鍋島直正（佐賀藩主、1815 - 1871）
・伊達宗城（宇和島藩主、1818 - 1892）

●参考文献

・**「蘭学楷梯」大槻玄沢　１７９０年版　　内田嘉吉蔵書**
・「蘭学事始」　杉田玄白著　緒方富雄校註　　岩波文庫
・「前野蘭化」　岩崎克己　片桐一男解説　平凡社東洋文庫　　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　分冊
・「冬の鷹」　　吉村昭　　新潮社
・「江戸の情報力」市村祐一　講談社選書
・「江戸の読書会」前田勉　　平凡社
・「江戸の外交戦略」大石学　　角川選書
・「日蘭関係の四世紀」マルゴ・ファン・オプスタル他　オランダ外務省、在日オランダ大使館
・「長崎を識らずして江戸を語るなかれ」松尾龍之介　平凡社
・「株式会社長崎出島」赤瀬浩　　講談社選書
・「鎖国と海禁の時代」山本博文　校倉書房
・「NHK 人間大学　テキスト」　１９９２年　養老孟司
・「平成蘭学事始」　　片桐一男　　智書房　　２００４年

６．おわりに

昨年開館した新荒川区図書館に「吉村昭記念文学館」が新設された。故吉村昭氏のゆかりの作品や書斎が復元されていて見どころが多くお勧めできる施設である。ご承知の如く吉村昭は綿密な歴史的事実を精力的に取材し、読み応えのある作品を世に出している。

今回のテーマ「蘭学の歴史」についても、今回紹介した「冬の鷹」以外にも著名な「長英逃亡」の著作がある。蘭学者である高野長英が、「蛮社の獄」で投獄され、小伝馬町の牢獄から大火事発生時に逃亡し、１８４４年～１８５０年の約６年逃亡生活を続けた（顔を硝酸で焼いて人相も変えた）。この間、蘭学塾仲間や宇和島藩伊達宗城候のお抱え蘭学者としての庇護を得たのも、蘭学の語学力は当代随一の学識であったことも要因である。最後は、江戸に戻ったことで、町奉行所の捕り手たちに踏み込まれ十手で殴打され絶命した。

杉田玄白、前野良沢の活躍で翻訳された「解体新書」（１７７４年）から蘭学黎明期を経て、更に７６年もの時間が経過しても、蘭学から近代化に至るにはまだまだ「時間」を要したことになる。

＜参考＞　「杉田玄白」と「前野良沢」人生比較　　（吉村昭）著「冬の鷹」より　水谷纏め

	杉田玄白	前野良沢（蘭化）
時代	（1733 年－1817 年）享年８５歳	（1723 年―1803 年）享年８０歳
成人期の職業	若狭小浜藩　藩医	豊前　中津藩　藩医
藩主、待遇禄高	酒井忠貫、　　禄高２２０石	奥平候昌鹿、昌高、　　禄高１００石
長崎遊学	弟子の大槻玄沢を遊学させる	藩命で 1770,1773 年２回遊学
親密な長崎通詞	西善三郎、吉雄幸左衛門	吉雄幸左衛門、楢林栄左衛門
主宰した塾 弟子	天真楼塾：江戸第一の阿蘭陀医学塾 芝蘭同塾：高弟の大槻玄沢主宰 宇田川玄真：解剖学 大槻玄沢：外科、蘭学研究者 荒井庄十郎：元長崎出島通詞	・塾なし ・玄白の依頼で大槻玄沢に阿蘭陀語を教えた。玄沢も大いに学び長崎にも遊学して力をつけ、「ターヘル・アナトミア」の完全翻訳版「重訂解体新書」を訳出。又蘭学入門書「蘭学楷梯」を出版、好評。
性格	事業家肌、出版事業、社交家、統率性	学問への情熱（学究肌）、人嫌い、偏狭
子孫	養子：伯元（外科医）	息子：達（良庵）急逝後、養子取ったが故有廃嫡後、仙台塩釜社君敬を養子
晩年の生活	小浜藩大橋の藩邸⇒堀留、御玉が池に 年収：６００両（寛政２年） （流行作家：滝沢馬琴４０両） 文化２年将軍家斉に拝謁 文明批評家、著述家 （医学、政治、外交、社会、道徳等）	・４７歳で青木昆陽に蘭学入門してから一貫して蘭学研究に人生を捧げた。 ・築地鉄砲洲藩邸⇒根岸、日暮里に自炊、一人暮らし長く、最後の１年を娘の嫁ぎ先に同居

以上